

私の授業

平山 琢二

生物資源管理学科

昨年から県大の教壇に立っていくつかの講義を担当しています。これまで前職の大学も含めいくつかの講義を担当してきた中で、本学で行われている「人間探求学」や「フィールドワーク：FW」がとても特徴的で面白く多くの可能性を秘めている講義だと感じています。これらの講義は、担当教員の考え方や教育方針がダイレクトに講義に反映されるため、その教育効果？成果？は各教員によって大きく異なっています。私はいずれの講義もまだ数回しか担当しておりませんが、学生にとって面白い講義でかつ実になり、さらに学生との距離を縮められるようなスタイルが作っていただければと考えています（言うは易くですが…）。

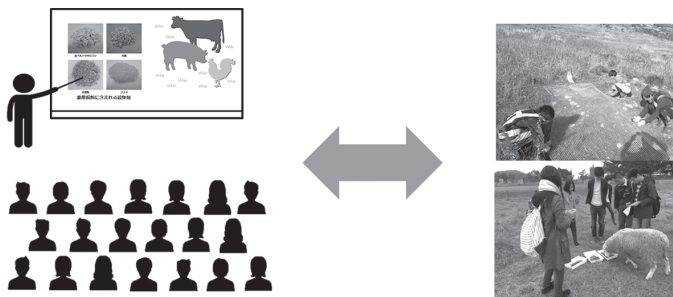


図1. 座学とフィールドワークの連携による教育効果の促進！？

今年のFW3では、ニホンジカによる植生被害などを調査しながら伊吹山登頂しました。登頂前と後では学生との距離がだいぶ縮んだと勝手ながら感じています（写真参照）。事前学習で、獣害の現状や

写真FW3で伊吹山登頂



対策などについて講義するも学生から気軽に質問や意見などは出てきませんが、フィールドに出ることで連帯感のようなものが生まれ、気軽に会話が出て

きた気がします。座学のみでは、なかなか教育効果が出ないがフィールドワークなどと組み合わせることで、その教育効果は大きく改善されるという話を聞いたことがあります。全ての講義がそうだとは言えないとは思いますが、教育効果を高める一つの方法であることは間違いないと思います。したがって図1のような教育ができれば、より教育の効果が高まると期待します。また、このような講義スタイルは「人間探求学」や「FW」でより実践しやすいのだろうと感じます。ちなみに、今年は講義で家畜の

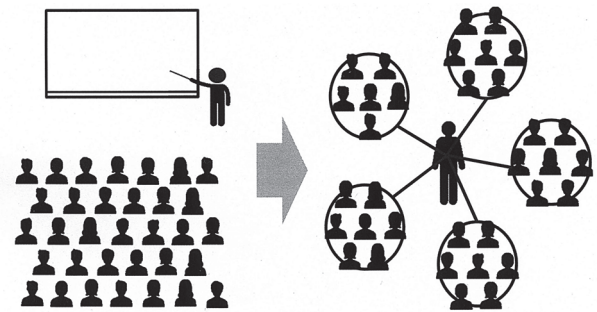


図2. グループに分割し学生との距離を縮め教育効果を促進？！

飼料嗜好性とその重要性について教授し、その後圃場に出て、本学で飼育されているヒツジたちに頑張ってもらい、飼料の嗜好性について実験的に体験させるというような事を行ってみました。教育効果の評価は難しいと思いますが、確実に言えることは、学生との距離が縮まることで、より細やかな情報を学生に提供できるようになりました。

座学の講義の中でどのように学生との距離を縮め（これだけが重要とうことではないのですが…）、1対全員で話をするのではなく、1対1に近づけるようなスタイルがとれるのだろうと模索してついで、図2のような構想（妄想？）が生まれました。受講生を数名のグループに分け、講義の前半をあるテーマに沿って基礎的な事項を教授すると同時に課題を提供し、後半では各グループで課題について考え提案してもらい、学生とのキャッチボールを密にできれば学生との距離を縮められるのではないかと考えています。まだ実践したことはないのですが、この場合、学生に提供できる情報量は減る可能性があり、その点が少し気になるところですが、全体として教

育の効果が高まるなら、と前向き？に考えています。実は来年度の講義で試験的に実施してみようと現在、準備を進めているところです。

ここ滋賀県立大学に赴任してから、どういう訳か講義に力を注ぐ機会が増えてきているように感じます。講義はかねてよりとても苦手で、その点は今も変わりませんが、“講義”を創意工夫する機会が増えていることは間違いありません。おそらく、本学の特色に感化されてきているのではないかと勝手に考えております。これまでは講義内容などについて、他教員と連携する機会がほとんどなかったのですが、本学ではそのような機会も多く、様々な刺激を受けることができることが、今の私の講義に対する考え方の変化に繋がっているものだと感じています。これからも滋賀県立大学の教育方針に沿いながら、他の教員から刺激を受け、楽しい講義ができるよう努力していきたいと考えています。